

氏名(本籍)	あり 有	その 園	ひろ 博	こ 子(鹿児島)
学位の種類	博士(医学)			
学位記番号	博甲第2690号			
学位授与年月日	平成13年3月23日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	医学研究科			
学位論文題目	Reminiscence Therapy using odor in alcohol dependent patients — psychophysiological evaluation and psychological evaluation ; Power spectral analysis of heart rate variability — (アルコール依存症患者に対するニオイを用いた回想療法—精神生理学的評価および心理的評価；心拍変動分析を用いた自律神経機能評価—)			
主査	筑波大学教授	医学博士	三澤	章吾
副査	筑波大学教授	医学博士	大野	忠雄
副査	筑波大学講師	薬学博士	田中	栄之介

論文の内容の要旨

(目的)

アルコール依存症患者に対して、ニオイを用いた回想療法を行った。これまでアルコール依存症患者に対して回想療法を用いた研究はなく、また回想療法におけるニオイの効果を検討した実証的研究も少ない。

そこで本研究では、アルコール依存症患者に対して回想療法を行い、その効果を高めるために、快のニオイ刺激を付加することによって肯定的な感情を伴う回想を促進し、これが治療に効果をもたらすことができるかどうかを心理学的評価および、自律神経機能評価を用いることによって検討した。

(対象と方法)

対象者はDSM-IVでアルコール関連障害と診断され、入浴治療を受けたアルコール依存症患者で、以下の6条件を満たす34名とした。1) アルコール離脱後4週間以上経過している、2) 病的な抑うつ状態にない、3) 認知障害がない、4) CT上、顕著な脳萎縮が認められない、5) 正常洞調律である、6) 嗅覚障害がない。

回想療法は、1対1の面接で、対象者一人につき2回実施した。2回の面接のうち、ニオイ刺激ありの回とニオイ刺激なしの回を1回ずつ設定しカウンターバランスを行った。さらに快感情を想起させるニオイ刺激を用いた。情動喚起に伴う生理的变化に対する評価指標としては、精神生理学的指標(HRV; Heart rate variability, 交感神経系活動=LF/HF; low frequency componentとhigh frequency componentの比, 副交感神経系活動=HF nu; HF normalized units)を用いた。心理的变化に対する評価指標としては、主観的評価である心理学的指標(STAI; State-Trait Anxiety Inventory, VAS; Visual Analog Scale)を測定した。

(結果)

ニオイ刺激が加わるとニオイ刺激が無い場合に比して、LF/HF抑制が有意に見られたが、HF nu亢進は有意ではなかった。

主観的評価では、STAIで、面接後には面接前に比べて状態不安得点は有意に減少したが、特性不安得点は変化しなかった。ニオイの有無による違いは確認できなかった。

ニオイを用いた場合にはニオイを用いなかった場合に比べて、交感神経系の抑制作用が証明された。すなわち、ニオイを用いて回想療法を行った場合には、患者はよりリラックスした状態で回想を行っており、回想療法の効果を高める可能性が示唆された。

(考察)

本研究の結果は、発話行為中という同条件下でニオイで加わるとLF/HF抑制へと変化したことから、より落ち着いた状態をもたらしたと考えられ、ニオイの効果として評価できる。STAIでは、面接前後の比較において状態不安の緩和効果が確認され、リラクゼーション効果測定を行った先行研究に一致した結果であった。

ニオイ効果としては、主観的評価上は認められなかったが、客観的評価上では交感神経系の抑制作用をもたらすことが確認された。対象者のニオイ認知の有無にかかわらずニオイが自律神経系に作用していることが示唆された。

本研究で試みた不安を和らげる補助手段としてニオイを用いる手法は、アルコール依存症患者への回想療法をより効果的にすると考えられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

ニオイ刺激を用いた回想療法をアルコール依存症患者に試みた研究である。

著者は既に高齢者に対して回想療法を試みており、その療法については熟達していると考えられた。

アルコール依存症に対しては回想療法が試みられ研究はこれまでになく、その意味でも本研究は評価できる。

快なニオイをかかせることにより、心理学的指標や精神生理学的指標を用いて情動の変化を観察しているが、その効果の判定に若干の問題点が指摘されたが、質疑に対しても十分理解できる解答が得られた。

結論としてニオイを用いて回想療法を行った場合には、患者はよりリラックスした状態で回想を行っており、療法の効果を高める可能性が示された。しかし、直ちにアルコール依存症患者の治療効果を高めているかどうかについては、明確な結論は得られていない点は検討課題として残る。ただし、回想療法が将来実務に應用できる可能性があることを示したことは高く評価される。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。